

[対談]

対談が語る臨床教育学

皆 藤 章 × 中 桐 万里子

はじめに

皆 藤 章

わたしは、2000年度から「臨床教育学概論」という名称の講義を、二回生以上の学部学生を対象に行ってきた。その第一回の冒頭で、わたしは、「おそらく、『臨床教育学概論』という講義が行われるのは、今日がわが国で初めてのことだと思います」と語り始めたのを記憶している。この語りには、臨床教育学がきわめて若い学問であることを伝えるとともに、従来の諸学問の講義形態が「～学とは何か」というように、学問の枠組みを語ることから概論を説き起こしてきたのにたいし、臨床教育学はそのような概論の形態になじまない、語り・体験から生成されるという特徴があることを、少なくともわたしはそう考えていることを伝える意図があった。すなわち、「臨床教育学概論」は既知の知識を説き明かすものではなく、受講する学生とともに「考えていく」プロセスをとおして成立していくものであるとわたしは考えていたのである。

それ以降、毎年度、わたしはこのような意図から本概論を講じてきた。それは、新たに講義形態を創造していくプロセスであるとともに、臨床教育学が生成されていくプロセスでもあった。この意味で、本概論を講じることは、わたしには必要不可欠でありながら、たしかに重苦しい体験でもあった。

毎回、講義にたいして感想なりコメントや質問のある受講生は、わたしが配ったA6版ほどの小さな用紙にそれを書き、わたしがそれを読んで、次回にフィードバックコメントをするという形態で講義は回を重ねていった。

そして、少しずつわたしなりの手応えが体験され始めた2002年度の講義から、わたしはひとつの試みを始めた。それは、本概論の誕生のときからを知り（初年度からほぼ欠かさず出席し）、折りに触れ興味深い質問や意見を語ってくれていた大学院生の中桐万里子さんと

対談を行うことであった。対談をとおしてふたりは、「臨床教育学とは何か」ではなく「何が臨床教育学なのか」を、そうとうに考え込んできた。

本稿に記すのは、その対談のはじめの二回分である。紙幅の関係もあるが、内容からみて臨床教育学の方法（論）が語り合われている、おおきな節目に当たってもいる。対談は、講義の数日後、その週の講義の内容をテーマに、自由な語り合いのスタイルで、毎回三時間あまりにわたって行われた。ちょうど、講義の内容をふたりの間に置いて、ふたりがそれについて自由に語り合うというものであった。現在の両者にとっては、語りに荒さを感じたり、考えの変化を感じるころもあるが、両者が考えてきた途上を記しておくことの大切さと、これから臨床教育学を考えていく人にとって、本稿で語り合われている内容がかならず意味深い示唆を与えるものと実感するので、あえて内容に大きな筆を入れずに当時の臨場感をそのままに残しておくことにした。

第1回（2002年4月25日、午後4時30分～7時）

■「フィードバック」という講義形態

皆藤：講義の感想から聴こうか？

中桐：感想って言えるかわからないけど、『先生が概論でされている「フィードバック」という講義形態って、はたして何だろうなあ……』、って考えてた。

で、『ああ、こうすることを通して先生は、ひとつのものの見方、それはひとつの〈方法〉でもあると思うけど、そういうものを語られてるのかなあ……』って思った。どうやってものを見るか、どうやってできごとを捉えるかっていうのは、臨床教育学にとっての大きなテーマ、あるいは臨床教育学そのものだと思うから、概論では「フィードバック」を通してそういうことを実際にやってみせてるのかな……と。『実際に素材を切って、その切り口を提示して見せる』みたいなイメージかな……。

皆藤：そのときの、「素材」が、学生からのレポートってこと？

中桐：そう。わたしは、『臨床教育学は〈方法〉だ』って考えているから、そうやって素材を実際に切ってみて、その切り口を提示して見せることは、臨床教育学にとっての実践じゃないかとも思う。

そしてたぶん、たとえばそういうものの見方や切り方が、具体的にはどんなポジションから実行されているものなのか、とか、どういう人間観や世界観をベースにしているのか、とか、そういうことを考えて詳細に検討していくことが、（概論を出発点にした）「研究」に結

びついていくんだと思うし……。それは、もっと先に進んで実際に研究をしていく人たちがすればいいことなのかなあ……と。

皆藤：そういうことって、講義中に考えた？

中桐：はい。2年前の概論のときはぼんやりと受けてたのか、そんなこと、全然思わなかったけど……。もしかしたら自分が実際に（看護学校で）「教える側」にも立ったからそんなことを考えたのかもしれない……。

■フレーム

皆藤：講義中にも言ったけど、わたしは、『臨床教育学は「概論」になじまない』と思っている。近代科学みたいに、「概論」が成立するような学問には、まず「フレーム」があると思う。そしてそういう学問の場合には、「概論」などを通じて、そのフレームを「私」である人間が「外」から眺め、「観察」することがなされる。つまり、点線だったフレームをさまざまな角度から観察し、検証していくことで、より強固な実線のフレームにして「区切り」を明確にしていき、自分が世界をみるときに使う「フレーム」として習得することが求められる。これまでは、そうやって「区切る」ことによって、他とは区別化された学問領域を成立させてきたと言えるんじゃないだろうか。

そうしたフレームで「区切る」ことがまず第一に必要なのは、学問がそうしたフレームを基礎として、それをベースにして、そこから上向きのベクトルを働かせて、その上にさまざまなものを積み上げていくことを「学」と捉えてきたからなんじゃないかと思う。フレームを土台にして積み上げるのだから、そのフレームが崩れてしまったらすべてが成立しないことになるわけで、そうなるとやっぱり必然的に、ここ（フレーム）は強固であることが必要になるだろう……。

こうやってまず確固とした何らかの「フレーム」によって「区切る」ことを前提・土台として、そこをスタート地点として世界（現象）を検討しようとする学問がある一方で、たとえばこんなふうに考えることはできないだろうか。

ここに「私」という人間がいる。素朴にそこからスタートする。そして、その「私」がさまざまなところに出向いて行くことによって、そこに何かが起きる。学校に行ったり、誰かと出会ったり……。そうすることでそこに「体験」が生まれると言ってもいい。さまざまな現象、それは事象と言ってもいいかもしれないけど、そういうものがその「私」の「体験」として生まれていく。

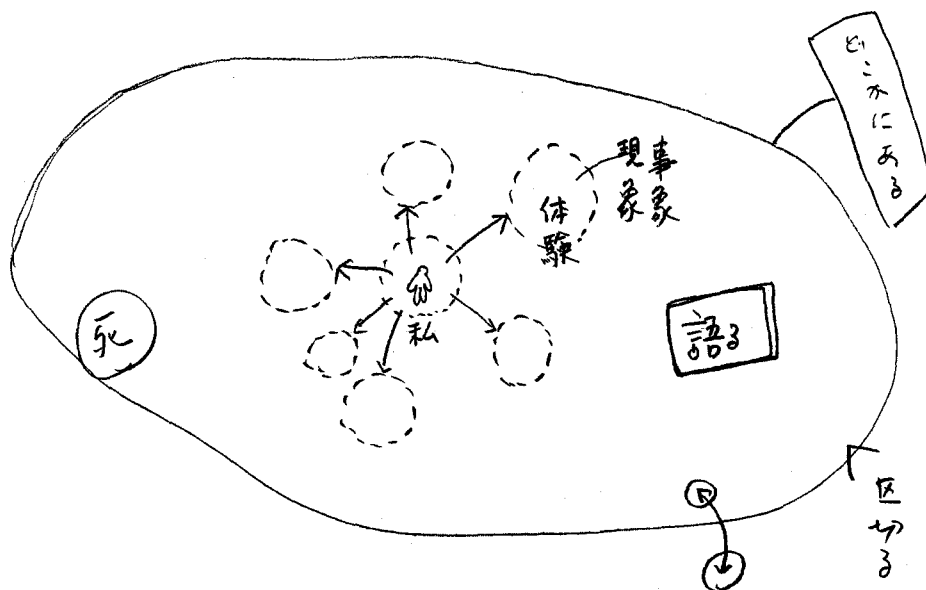


図1

そう考えると、それらの現象・事象をあらかじめ区切る何らかの「フレーム」なんてものは存在しないと考えることができると思う。ただ、わたしは、フレームがまったく存在しないとは言わない。たとえば、「死」という現象について考えてみようとしたからと言って、「じゃあ実際に死んでみよう」というわけにはいかないように、「フレーム」という考え方をなくしてしまうのは、危険なことだと思うから。やっぱりフレームはあるんだと思う。そうした数々の「体験」を取り囲むように、何らかの「区切り」や「フレーム」は、「どこかにある」と考えている。しかしそれは、あくまで「どこかにある」ものであって、あらかじめ枠組みとして設定したり、クリアに提示したり指し示したりするのはとてもむずかしい（図1）。

だから、臨床教育学は何らかのフレームからスタートするのではなくて、こういった現象の捉え方からスタートしたらどうだろうか……と考えている。それが、講義中にわたしが言っていた、「フレームからの解放」とか「臨床教育学においては、あらゆる事象が概論や深化の対象になり得る」ということの意味でもある。

■流動する存在としての人間

皆藤：これまでの学問は、現象を捉えるときに手持ちの「フレーム」を使ってきた。「私」という人間の「体験」として生じる何らかの〈丸い〉現象を、かっちりと固定化された〈四角い〉フレームで切り取ろうとしてきた。そして、そうやって切り取ることを「理解」と呼んできたんだと思う。だけどわたしは、ここに大きな違和感を覚える。

人間やその人間の体験は、決して「固定化」することのできない流動的なものだから、それをフレームによって切り取ろうとすると、そこにはどうしても切り落とさざるを得ないものが出てくる。そうやって切り落とす行為っていうのが「排除」であって、こうした「排除」の上になら「理解」は成立し得ないとも言えるだろう。そしてわたしは、切り落とされ、「排除」されてしまうその小さな部分にこそ、「宝」とも呼べるような大切なものがあると感じている。だからここが抜け落ちることに、ひどく違和感を覚えるんだと思う。おそらくこの「宝」、つまり、流動性と関連しているために「フレーム」では掬い切れずに落とされてしまう部分っていうのは、わたしのことばで言うならば、「相対性」や「関係性」のことだと言えるだろう。

この辺りが、前にも講義で話した、「境界例患者」の「理解」なんかと絡んでくるところになる。「境界例患者」という「フレーム」、それはたぶん「ラベル」と考えてもいいだろうけど、そういうものを「当てはめる」ことによってその人を「理解」しようとする行為は、そこに生きている「その人そのもの」を「知ろう」とすることとは大きく違う。「ラベリング」や「レッテル貼り」や「フレーム化（フレームによる切り取り）」は、その現象やその人間そのものを見つめることとは違うと思う。

そういえば、わたしは最初は、これまでの学問は人間（「私」）がそれぞれの学がもつ「フレーム」の中において、そこから世界や現象を眺めていて、その枠の外には出られないのかなぁ……とイメージしたんだけど、もう少し考えてみて、やっぱりそうではないな……と思った。そして、「私」は、フレームの外において、それを観察したり補強したり、あるいはそれを道具のように使ったりしているんだぁ……と考え直した。

■語る／物語（意味の創造・体験）

皆藤：じゃぁ、臨床教育学が、人間やその人間の「体験」としての事象を見つめる、あるいはそれについて考えるっていうのは、一体どういうことだろう？って考えてみると、それは「語る」ということと大きく関係してくるんだと思う。「私」（人）は、それぞれの事象に積

極的に入り込み、そこに身を置くことで、ある体験をする。それは、それだけだったただ漠然とした(かすかな点線のような)体験そのものだけど、それを「語る」ことを通して、よりクリアな(はっきりとした実線のような)「体験」へと変質していくんだと思う。そしてさらにこの体験は、固定化したなんらかの「実体」ではなくて、それぞれの角度から「語る」ことでさまざまな「意味」が生まれるもの(「可能態」)でもあって、ある方向から光を当てると円形の、別の方向から光を当てると四角の、さらに別の方向からならば三角の……といった具合に、それぞれの角度の「意味」を生み得るものだと言える。そしてそのように、人間が、ある「体験」にさまざまな「意味」を創造していくプロセスに、臨床教育学が在るということが出来るかもしれない。その意味で、「私」を排除して「フレーム」で事象を「理解」しようとする近代科学のパラダイムと、積極的に「私」を入れ込むことを通して「意味」を創造しようとする臨床教育学のパラダイムは、まったく異なるものだと言えるだろう。

こう考えると、河合隼雄が提唱しているような、世界や「私」を「物語」というタームで捉えていくことの重要性なんかも言えてくると思う。人は「語る」ことを通して、それぞれの体験を「体験」たらしめていってるんじゃないだろうか……。

だからここで、「ことば」というものがとても大切になってくる。「ことば」を通して語ることが、「体験」が「意味」を持つために重要な役割を果たしていると思う。

■わかる／普遍

皆藤：それから、ここで注目した「語る」という行為、あるいは「物語」というものを考えると、そこには「語り手」と同時に「聴き手」が存在する、ということに注目する必要があるだろう。これらは、どうしても「関係性」ということをベースにしなければ成立し得ないと言える。まٰこの場合の「聴き手」っていうのは、具体的な実在としての人間だけを相手として考えなくても、「自然」とか「世界」のようなものを考えてもいいと思うけど……。

で、この「語る／聴く」の関係にはさまざまな層があり、それぞれの次元があると考えられる。心理学では人間のもつ意識の次元を層的に考える伝統があるけど、その捉え方を用いるなら、語り手がどんな次元から語り、聴き手がその語りをどの次元で捉えるか……、といったことも、「関係性」を考えるには重要なところとなるだろう。もし、聴き手がかつても深い意識の層、これはたぶん「普遍」の層だと言えると思うけど、その層で受け止めよう、聴こうとしているのに、語り手が表層的な次元から語ったとしたら、それは『お話にならない』

わけで、二人の関係はうまく成立しないことになる。

このように捉えると、二人の人間（語り手と聴き手）の「語る／聴く」という関係におけるわかるには、さまざまな「レベル」があると言うことができる。表層的な（頭と頭の）やりとりによってわかるのは、ある意味で、それぞれの体験領域でのわかるにすぎないものと言える。そこでの関係は、あくまで「個」と「個」のやりとりであって、互いの個別的な体験領域を出ることがないし、個人レベルに留まるものと考えられる。

わたしは、それに対して、もうひとつ別のレベルのわかるがあると思う。それは、語り手の語りが、両者を超えた第三のものとしての「何か」を通して聴き手に入ってくることによってもたらされる〈わかる〉というもの。それは、「個」と「個」のやりとり、という次元をはるかに超えた領域の関係性であって、そこで体験されるのは「普遍」レベルの〈わかる〉だとも言える。そしてさらには、そういう「普遍」レベルの第三のものとしての「何か」に触れてしまう手前には、「身体性」というものが入ってくるとも考えているけど……。わたしはこの辺りを、語り手の語りは「身体性」を通した上で「何か」に入っていく、それはまた「身体性」を通して聴き手に入っていく……。というプロセスとしてイメージしている。

と、こんなことを考えているけど、何か思うことはある？

■「どこかにある」フレーム

中桐：たくさんありすぎて……。どこからどう言ってもいいかわからないぐらい……。でもまあ、さしあたって、思いつくままに言ってみます。

まずわたしは、図1で言われていたような、「どこかにある」というフレームこそが、「わたし」¹⁾ なんじゃないかと思う。あるいは、そのフレームが包含しているそれぞれ個別の体験や事象や現象もまた、やっぱり「わたし」なんじゃないかと思うから、この辺りが、自分でもまだうまく整理ができないのだけど……。でもだから、少なくともこの図1の真ん中に描かれている「私」というのは、たぶん実体的な人間を指しているんだと思うけど、そういう意味ではない先生のことばで言うなら、そのつど生成している「流動的な存在」としての「わたし」が、ここに「どこかにある」ものとして描かれているフレームであり、それぞれが点線で描かれている「体験」でもあるんじゃないかと思った。ここで言われるようなフレームは、わたし（人間）を取り囲む何かではなく、「わたし」そのものだと感じた……。

皆藤：それは、そうだと思う。そして、そうだからこそ、わたしがここで「どこかにある」としてあくまで「区切る」ことにこだわるのは、「関係性」や「相対性」という人間の在り

様に関連していることだと言えるだろう。人にとって、「区切る」ことが必要なのは、あるいは事象が単なる体験でなく「語り」を通じて「意味」が創造されることで「体験」へと変質していくこと、そのことが必要なのは、それは人間が「相対性」のなかに生きているからだろう。それはまた、「他者」との関係を生きる者としての「私」だからこそ、フレームが「どこかに」は必要になるのだとも言えるかもしれない。

■死

中桐：それから、もうひとつ。これは確認になるけれど、先生はこの図1の中で、「死」というものを「どこかにある」フレームの「内」側に入れてるんですよね？ 図ではそうなっているけれど、さっきことばでは「死を考えるのに実際に死んでみることはできないし……」と言われていたので、ちょっと気になって……。

皆藤：たしかに、わたしは「死」というものをフレームの内側に入れている。そのことから思い出したけど、『「死」と「死体」とは違う』っていうことを概論の講義のレポートに書いていた学生がいた。たぶん、今の議論はその辺りのことだと思う。

中桐：そう。わたしもそう思う。たしかに、生きているかぎり、人間は「死体」になることはできない。けれど、「死」を「体験」することはあり得るんじゃないかと思う。だから、やっぱり「死」もまた、「わたし」であり得るし、ここでいう「体験」のひとつになり得るし、フレームの内側に入るだろう……と思った。

■排除／「わたし」でなくなる

中桐：それから、「排除」のところが、わたしにはなんとなくしっくりこない。わたしは、「わたし」の体験がフレームによって切り取られ、切り取れなかった部分が捨てられ、「排除」される……というイメージだとしっくりこない。それは、一部分の「排除」というより、切り取られた時点で「わたし」ではなくなる……と感じてしまうから。その時点で「わたし」とは別の何かにになってしまうような感じ。だからフレームは、「わたし」の一部分でさえ切り取るなんてできるものではなくて、むしろ「わたし」にかぶせる鋳型みたいなものじゃないかとイメージする。フレームを「わたし」に適用することとは、「切り取る」ことではなく、無理やり型を「かぶせる」ことだ、というイメージの方がわたしにはなじめる。

■理解

中桐：そして、その辺りと関係するかもしれないけれど、「語り聴く層」のイメージも、若干わたしのイメージと違うと感じた。わたしは、「人間」をイメージするとき、「重なり」で考えている。それは、「層」的な「深さ」と関連するものではなくて、いろんな色や絵や光が幾重にも重なって一枚の「図」＝「わたし」を作り出しているというような「重なり」のイメージ。「すかし」のイメージと言ってもいいと思う。それまでのいろんな体験や、できごとや、環境や、意味や、そういうものが「すかし」のように重なることでその人を創り上げる……、そんなイメージ。だから、「層」のイメージがピンとこない。この辺りは、薄い紙の原料を幾重にも敷き重ねて一枚の紙をつくりあげるといった「紙漉き」のイメージかも……。

皆藤：その場合、もしそのときに赤い色が強烈に浮き上がっている「すかし」でも、新しい図柄が重なることでまったく違う「すかし」になって、その赤色が薄らぐ可能性っていうのもあるってこと？

中桐：そう。

皆藤：……。だとすれば、その「すかし」のイメージって、心理学では「コンステレーション」って呼んできたものじゃないかとも思うけれど……。

中桐：それからその延長で、普遍レベルの「第三のもの」としての「何か」についても、ちょっと違う形でイメージしていた。わたしは、ここで「生み出される」とされている「第三のもの」による〈わかる〉は、二つの「すかし」＝二人の人間、二人の「わたし」が、ふっと「重なりあってしまう」瞬間に起きる理解のことなんじゃないかとイメージしていた。それは、二人を超えた「何か」が両者を超えた「第三のもの」として別に生み出されて、両者の間に置かれるっていうのではなくて、二人の人間の在り様そのものが「重なる」んじゃないか……というイメージ。もちろん、それぞれの体験の質や内容が同一であるってことではなくて、その意味で、二つの「すかし」が融合して一体化するということではなくって、あくまで「重なり合う」あるいは「シンクロする」という感じなのだけど……。

皆藤：それは、「瞬間」なの？

中桐：「瞬間」だと思う。それは、持続できるような「重なり合い」ではあり得なくて、やっぱりすぐに、それぞれの場所に分離していくものだと思う。

皆藤：うーん……。そういう意味では、その「重なり合い」が生まれる前のものとして、わたしのイメージが考えられるのかもしれない。

中桐：えっ？ 生まれる前？ わたしは、その二人の「重なり合い」のイメージと先生のイメージは同じ事態を指し示そうとしてるものだと思っていたのだけど……。

皆藤：それと、その場合、そういう「重なり合い」を「理解」って呼ぶの？

中桐：わたしは、本来的にはそれこそを「理解」って呼ぶんだと、あるいは、それを「理解」って呼んで欲しいと願っているんだと思う。その意味では、先生が、「排除」のところで使われていた「理解」ということばや、今、世間で一般的に使われている「理解」ということばとは違うものになるのだろうけど……。だからもしかしたら、他にいいことばがあれば、そっちを使ったほうがいいのかもかもしれないけど……。

でもわたしは、一般的に人が軽々しく「理解」ということばを使うことをとても気持ち悪く思うし、そういうのって、「理解」ということばがすごく汚されていくようで腹が立つ。だからわたしは、そうじゃない、もっと神聖で奇蹟的なことばとして、「理解」ということばを取り戻したいとも思う。その意味で、やっぱりそういう、ある瞬間に奇蹟的に起きてしまう二つの「すかし」の「重なり合い」を「理解」って呼びたいんだと思う。

皆藤：「理解」の語源って何だろう？ 英語なら under/stand だから、「下に立つ」って言うことだし、もしかしたら、今言っていたような意味があるのかも……。

ただわたしは、やっぱり「理解」っていうことばには、『その話は自分の文脈にのりました』とか、『あなたの話はこちらの文脈に入りました／入れました』という操作的なニュアンスを強く感じて嫌悪してしまう。この辺りのことばへのイメージや感じるニュアンスは、わたしの場合、ロジャースの「共感的理解」っていう概念なんかの影響があるかもしれない。ロジャースは、「理解なきところに共感なし」あるいは、「理解が深まるにつれて、そこに共感が生まれる」っていうようなことを言っている。これを知った当時から、今もだけど、わたしには「人間は理解できない」という基本姿勢があるから、この「共感的理解」っていう概念は到底受け入れられるものではなかった。そこで言われるような「理解」は、たんに、『こちらの文脈に「取り入れる」』ということではかないんじゃないかと思ってしまう。

しかしそう考えると、「知る」も「わかる」も know っていう英語になるけど、これらの単語って、やたらと使われるなぁ……。I understand とか I know とかって、英語圏ではほんとによく使われるけど、なんかこれって……。

中桐：でも、“I” っていう主語と一緒に使うから、まだ誠実じゃないですか？ あくまで「私にかぎったことですけど……」っていう限定がついてる感じがするし……。日本語で「それ、わかるよ」とか言われる怖さに比べたら……。

皆藤：それはそうかもしれないけど……。

中桐：そういう俗的な、汚された意味での「わかる」や「理解」ではなくて、さっきも言っていたような奇蹟的なできごととしての「わかる」や「理解」は、そんなに多いものじゃないし、そんなに何度も体験しているようなものじゃないけど、でもやっぱりたしかに「ある」と、わたしは思うのだけど……。

皆藤：この前の大学院のゼミの後、ある院生に、「(私が他書の論文に書いていた)『知る』っていうのは、どういうことですか？ 私にはわからない」と訊かれたんだけど、そのときわたしは、「それは説明することはできない」と応えた。そして、「あえて比喩的に言うならば、電流がビビっとからだを走り抜ける感じ」と続けたんだけど、そういうのって、イメージできる？

中桐：できる。だけどそう考えると、あの瞬間って別に「わかった」とか「理解した」という認識の次元とは別の体験だから、それは「理解」とは、呼べないのかなぁ……。

皆藤：そうかもしれない。そして、その意味では、やっぱり「瞬間」なんだと思う。だけど、わたしはその「瞬間」を「抱える」ように意識している。その人との関係において、そのからだを走り抜けた電流の感覚を、内容じゃなくて「感覚」を、忘れないように抱えることは心がけている。

それから、中桐さんはこういうことは「滅多に起きることではないけど……」と言ってたけど、それはそれで、だからこそ、わたしたちはそういう数少ない「瞬間」を大切にできるんじゃないだろうか？ もし、こんなことが日常的に起きていて、いつでもからだに電流がビリビリ走っているようだったら、それは神からの啓示を常に聴いている「宗教家」になるんだと思う。そういう人は、何らかの「宗教」を開くことのできる「教祖」的な存在になるんじゃないだろうか……。しかしわたしたちはそうではない。こういうのは、量や数の問題ではない。いかにそういった体験を大切に感じ、抱えて生きられるか、という点が重要なんだと思う。

■身体（性）と肉体

中桐：なるほど……。でもそういう意味では、この「瞬間」を考えるには、やっぱり「からだ」とか、ここで言うなら「身体性」というところは、大事なポイントになってくるのかなぁ……。ここを抜きにして考えると、ものすごくうさん臭くて、怪しいものになってしまうそう……。

皆藤：たとえば、統合失調症の人たちの生きている世界について語ったある人によると、統合失調症の人たちのなかには、いわゆる「症状」が取れてくると、「肩こり」のような身体症状が出てくる人があるらしい。それを知ってわたしは、統合失調症という症状を生きるとは、どんどんと「身体」を差異化し、それを失っていくプロセスなのではないか……。つまりそれゆえ、その症状が失われていくことで、「身体」を取り戻していくのではないか……。と思った。

中桐：それって、「身体を肉体化していくプロセス」ってことでしょうか？ わたしは今の話を、「身体」を可能なかぎり殺して、コントロール可能な「対象」として、「肉体」という「モノ」へと封じ込めて変質させる……。というイメージで聞いたけれど……。

皆藤：そうかもしれない。そしてそれはまた、「身体」を「区切る」ということでもあるんじゃないだろうか……。

中桐：固定化して、対象化するってこと？ 「身体」をなくしていく……。そうすることで、世界も変質していく……。

皆藤：科学もまた、そうやって「身体」を失ってきたのかもしれない。その意味では、臨床教育学は、どうやって「身体（性）」を取り戻していけるのか、っていうことがテーマになる「取り戻していくプロセス」なのかもしれないな……。

■世界

中桐：そういえばさっき、先生は「語り」や「物語」の成立のためには「聴き手」が必要だって言われたとき、それは人物でなくて、「世界」であってもいいって言われたけれど、そのときの「世界」って何ですか？ わたしその、「世界」とか「自然」ってわからない。ぜんぜんイメージができない……。

皆藤：『「体験」を通して生み出される「私」という在り様』、かな。「世界」って、『「私」が見ているものそのもの』だと思う。

中桐：なるほど。そう言われると、すごくしっくりきた。

実は、今度の学部生の基礎ゼミでわたしがティーチングアシスタントとして担当するのが、「世界・宇宙」っていうテーマで、わたしは最近、そのことで途方もなく悩んでいた。「宇宙との一体感」とか「自分が分化することによって得られる世界との融合感」みたいな脈絡で出てきたテーマだったから、それっていわゆる「悟り」とかのことなかな……。とか、とにかく何のことかさっぱりわからなくて……。でも、「わたしという在り様」と言われたら、

ものすごくすんなりと見えてくる気がする。

皆藤：そう考えると、これまで人は、「世界」っていうものもまた「区切って」対象化して、「私」から引き離して考えてきたんだろうなぁ……。だから、今わたしが言ったような意味では使われてきてないのかもしれない……。

わたしが近代科学のパラダイムに違和感を覚えた大きなきっかけって、「こころ」をどう考えるか、ってところだった。科学のパラダイムを土台とした心理学では、実際には見えない「こころ」を、丸い円(○)のようなものを描いて、それを層化して、「意識」「無意識」……みたいな区分をしていって、『これが「こころ」です』、なんて言う。そういう考え方にひどくなくない感じをもったのが、最初だったんじゃないかな。これが、「フレーム化する」とか、「区切る」ということかな……。

■相対性と関係性

中桐：その「世界」のことと関連して思ったのは、わたしは今まで、『どうして「わたし」を考えるのに、「相対性」とか「関係性」という文脈で考える必要があるんだろう？』って思ってた。わたしにとっては、「わたし」っていうのは、むしろもっと「絶対的」なもののようにさえ感じてたから……。その「わたし」をわざわざ「関係性」とか、「相対性」という側面への着目を通して考える必然性って、ぜんぜんピンときてなかった。

皆藤：で、今もそう思う？

中桐：それが、今日はじめてその辺りがしっくりと収まった。ここでの話を聞いていて、たとえば、『「わたし」は、「相対性」とか「関係性」というなかで生きるがゆえに「わたし」という境界を語り出す必要がある……』、というようなことを先生が言われたところでも、すごくこころが動いた。それから、『体験が貌とした体験のままではなく、語りを通して「意味」をもち、「わたし」という「世界」をつくり上げていくことが求められる』、っていう辺りでも、『そうかぁ。「わたし」じゃない者が存在するからなのかぁ』って。『「自分以外の世界」があるから「自分」を主張することが必要なんだなぁ』って、納得してしまった。もしかしたら、先生の言われている意図と違うかもしれないけど……。

でもわたしには、そういう観点から捉えるなら、たしかに「関係性」や「相対性」こそが、「わたし」(人間)を考えるときにベースになってくるものになるなぁ……と、思えた。

皆藤：そういう意味では、「関係性」と「相対性」とは、別のことを指すことばとして使われていると言えるかもしれない。「関係性」っていうのは、「自我的な「人」と「人」との関

係」みたいな文脈で使われるし、「相対性」っていうのはそれとは逆(?)のベクトルで、「自我から離れて行こうとする、「私」ではなくなるような在り様」といった文脈で使われているのでは……。

中桐：えっ。先生が使われている「関係性」っていうことばも、「自我的な関係」を指すようなもの？ 少なくともわたしは、そうやって捉えたことはなかった。むしろ今、「相対性」ということばの説明として言われたような世界を指すことばとして理解していた。

皆藤：そう言われてみると、今はたしかに、少し揺れているかもしれない。前に本²⁾を書いたあたりから、自分の中で少し使い方が変わってきているかも……。ただ、通常は、たとえば心理学の世界なんかでは、「関係性」と言えばやっぱり個人と個人の自我的な関わりのことを指すと思う。

中桐：そうなると、また、あんまりよくわからなくなるのかもしれない……。そういう「関係性」を軸に「わたし」を考えるってことが、もしかしたら論理として頭で理解することはできるかもしれないけど、わたしにとってはひどく納得ができにくい……。

■意味

中桐：それから、「語る」のところで先生は、『語り』を通して「体験」が「意味」をもっていく……』ということを言われてたと思うけど、ここで、言われてる「意味」っていうのは、「姿勢」や〈方法〉を通して生み出されるもののこと？

皆藤：違う。

中桐：違う……のかぁ……。わたしは、これを聴いたとき、すぐに、『「意味」のない「体験」なんてあるのだろうか？』と、ここはとても気になった。

皆藤：わたしはあると思ってる。わたしがもしそれを問われたら、『すべての体験に意味はあり、そして、すべての体験に意味はない。』と答えると思う。矛盾してるみたいだし、ずるいみたいだけど、そう答えると思う。

中桐：その辺り、あんまりよくわからないけれど、わたしは「意味」のない「体験」ってないんじゃないかな……と、ちょっと思っていた。「体験」って「意味」そのものなんじゃないかって……。

人は、ただぼんやりとできごとを過ごすこともできると思う。ただ、そのできごとが、その人(「わたし」)にとっての「体験」になるってことは、そこに何らかの「わたし」なりの「意味」が見出されたときなんじゃないか……、と思った。

皆藤：そういう使い方ならそうかもしれない。ただ、「意味」っていうのは、通常は対の概念として「無意味」っていう語を生み出してしまうことばであって、何らかの「目的」と結びつけて使われることばだから、そうなるちょっと……。

中桐：なるほど……。でも、わたしが使っているのは、そういう何らかの「目的」を達成して得られる「利益」とか「メリット」とか「生産性」とか……。そういうものと繋がる「意味」ではなくて、だから、「無意味」それって「無駄」とかとイコールなのかな？ ともかく、そういうものと対になることばとしてじゃなくて、『「体験」が放つ「光」』みたいなイメージのものとしての「意味」、のつもりだった。

たとえば、まったく同じ時間に同じ状況やできごとに身を置いたとしても、人によって、そこにどんな「わたし」が関わるかによって、それぞれ全然違うできごととして「体験」されるんだと思う。そういう意味では、その「体験」のもつ「意味」っていうのは、「わたし」によって全然違う色や強さをもった「光」を放つ……。と考えられる。それは、さっき先生が語られていた、どの角度からそのできごとを「体験」するかによって、そのできごとはいろんな「光」を放ち得る……。ってことでもあるんじゃないかと……。そう考えて、「光」を放ってない、つまり「意味」のついてない「体験」ってあるのだろうか、そんなことを思った。

でも、やっぱりあるのかな……。『意味』のついていない「体験」って、あるような気もする……。よくわからないけど、わたしはその辺りってたぶん、「自覚」ってことと関係してると思う。できごとは、「わたし」によって、ある「自覚」がなされたときに何らかの「意味」という「光」を放つ「体験」になる……。みたいなイメージかな……。

皆藤：それは、わたしが「体験知」と言ってる辺りかな……。

中桐：「体験知」かぁ……。なるほど。そうすると、わたしが「できごと」と呼んでるものが先生のことで言うと「体験」で、わたしが「体験」とか「自覚されたできごと」と呼んでるものが先生の「体験知」にあたるのかなぁ……。わたしがこだわってる「自覚」が、先生の「知」と呼ぶものなのかなぁ……。

皆藤：その二つをあわせたことばもある。それは、「覚知」っていうことば。

■体験

皆藤：どうしてわたしが「体験」ということばを使って、「経験」を使わないかわかる？

中桐：「経験」には、「からだ（体）」が入ってないから？

皆藤：そうとも言える。前に一度、「経験」と「体験」の区別をはっきりとさせるためには、語源というか、哲学の世界ではどういう区別で使われてきたのか、という点から説明したらわかりやすいんじゃないかと思って、哲学思想事典を調べたことがある。でも、それでは全然わからなかった。それを読んでもかぎりでは、わたしのイメージと逆の使われ方のようにも感じるし、でも、どちらにしてもあんまりピンとこないような気もして、結局はよくわからなかったからやめたんだけど……。

まあ、さしあたってわたしは、なんとなく「経験」って言うと、できごとを自分から切り離して、遠くからそれを眺めてるような、客観視して語っているような、そういうイメージがあると感じる。そして一方で、そうじゃなくて、もっと積極的に事象や現象に入り込んでいって、それを「私」が「語る」ことを通して「体験」になっていく……というイメージ。わたしは、そうやって事象に入って、「体験」として受け取って、そこからものごとを考えていく必要があるんじゃないかと思ってる。

中桐：そういう意味では、臨床教育学にとっては、「体験」ってすごくキーワードになってくことばなのかな……。このことばもたぶん、「理解」と同じように、通常の世界ではもうすでにすごく汚されてしまっていて、もっと軽率に使われることばになってる気がする。でもここで使っている「体験」っていうことばは、さっきも言っていた「知」とか、姿勢とかと結びついてくる、もっと大事な何かだと思うし……。

皆藤：そうすると、「体験」ってことばも、ちゃんと定義して使う必要があるのかもなあ……。

対談後の感想 (2002年4月26日)

中 桐 万里子

◆「臨床教育学」という〈方法〉は、一体何とリンクしているんだろう？

科学などが追及し、編み出してきたこれまでの方法は、先生が言われているように「結果」に大きく呪縛され、そこと強力にリンクすることによって成立してきたものと言えるでしょう。その「結果」は「目的」と結びついた「結果」であって、何らかの「目的」を達成しようとするところの動きを原動力にして、そこを動機として、生産されてきたものでもあると思います。そしてそれは、「操作」のすえに「手に入れるもの」、あるいは、方法によって「生み出す」「結果」だったと言えるかもしれません。

一方で、「臨床教育学」という〈方法〉にもまた、それが〈方法〉であるかぎりにおいて、やはり「結果」はついてまわるものだと思います。でもそのときの「結果」は、「手に入れ

る」ものでも、「生み出す」ものでもなく、先生のことばを使うなら「もたらされるもの」なんだろうと思います。だからそれは、「目的」と結びつくことによって、何らかの「評価」の対象となる「結果」ではなくて、「生まれてくる」「何か」なんだろうと思うんです。

でも……。そう考えると、「臨床教育学」とは一体何とリンクしている〈方法〉なんでしょう？ その〈方法〉を編み出そうとするところの働きは、それを必要だと感じるところの動きは、どこからエネルギーを得て動いているんでしょう？『こんなにも〈方法〉の探究をしようとするわたしの「動機」って何なんだろう？』と考えてしまいました。そして、『「わたし」として生きたい』『「わたし」になりたい』という想いかな……。と、思いました。そういう想いが、「動機」となってわたしの探究を支え、原動力になっているのかもしれない……。と。

これまでの「動機」は、人間の操作性の内に閉じ込められ、「目的」という呪縛に絡め取られ、『あらかじめ設定されている「何か」（それは具体的なモノでも、「医者になる」といった状態のようなものでも）を「手に入れる」こと』と同義のように扱われてきたように思います。しかし、わたしがここでイメージしている「動機」は、そういう「目的」とは繋がりが得ないものです。

それは、そもそも『「わたし」が何か』ということがわからないからです。「手に入れる」べき状態としてのなんらかの姿や行為を「あらかじめ」思い描くことなどでできず、あくまである「姿勢」によって「もたらされる」のを待つしかない存在の在り様が「わたし」なんじゃないか……。と、さしあたって今のわたしはそんな風にイメージしているのですが、そういう「わたし」とリンクしている「動機」は、「目的」とは呼ぶことができないと思うのです。

こんなところから、『臨床教育学という〈方法〉は、「動機」と強く繋がっている』という仮説をひとつ立ててみました。

◆「臨床教育学」という「新しい〈知〉」が拓く地平とは何だろう？

先生はこの前の講義で、「もたらされる「知」は、個別性から生まれたのであるから個別に作用する。この意味では、かならずしも一般性・共通性をもたない。けれども、個別に作用する「知」が対話・交信・交流の循環をとおして、普遍へと到る方向性をもちうるものが起こる。臨床教育学はそのような方向性を見出していこうとしている。」と語られていましたが、この辺りのところが、すごく気になりました。

わたしは、最初にこれを聴いたとき、「もたらされる「知」は、個別性から生まれたのであるから個別に作用する。」という文に、すごくドキドキしました。『ああ、きっとここが、臨床教育学にオリジナルな魅力だなあ……』と思ったんです。だから、この一文をもっともって展開させて、ここについて語ることばを丁寧に紡いでいきたいなあ……と感じていました。でも先生は、続く文章の中で、臨床教育学は「普遍へと到る方向性を見出していこうとしている」と書かれていました。前文にドキドキしていたわたしにとっては、この後半の文はしっくりきませんでした。臨床教育学という「知」が切り拓こうとしている地平って、やっぱり「普遍」なののでしょうか？

こういうところのざわめきから、臨床教育学という「知」や〈方法〉の探究ということが、他者（あるいは社会）にとって、一体どんな意味をもたらし、どんな働きをするのだろうか……、と、考えました。

わたしは「普遍」という地平を、『「共有可能性」や「協約可能性」といった性質と強く関連している場所』というイメージで捉えています。だから、ここで紡がれる「知」や〈方法〉が、もし、「共有」や「共通理解」という形で他者に還元されることが期待されるなら、それはやっぱり「普遍」という地平に触れずにはいられないのかなあ……と思うのです。でも……。

わたしは、臨床教育学という形で紡がれる〈方法〉は、「共有」という形ではなく、たとえば、「提示」あるいは「刺激」という形で他者に還元されていくものなのではないかと思うのです。それは、決して互いに「共有」できる「モノ」ではなくて、ひとつの「刺激」として「提示」できる「スタイル」なのではないか……、と。あるひとつの〈方法〉（＝ひとりの「わたし」）との出逢いは、他者にとっては自分自身をみつめ、自分として生きることを考えるためのきっかけや、そういった「生」への刺激としての意味をもつのではないか……、と。そういう「意味」や「機能」や「働き」を、〈方法〉が切り拓く地平と捉えるなら、それは「普遍」（人間）というよりやっぱり「個別」（「わたし」）なんじゃないか……、と。

こんなことを考えましたが、ただこのとき問題なのは、わたしがいまいち、「普遍」ということばに込められた先生のイメージがつかめていない……、という点だと思います。ここで先生が使われている「普遍」って、近代科学が主張してきた「論」や「体系」へと繋がっていく「普遍」とはどのような差別化が図られているのでしょうか？ その二つの「普遍」の間にある温度差とは一体……？

この辺りはわたしももう少し考えてみるので、またゆっくりとお話したいです。

しかしそれにしても、こんなことを思ってみると、やっぱりわたしの限界が見えてくるんだなぁ……、と、しみじみ感じてしまいます（その「限界」が善いものか悪いものか、越えるべきか否か……などは、さしあたって問わないとしても……）。わたしは、どうしても「我」が強いようです。どうしても「わたし」という場所を離れられない……。

たとえば「わかる」という事態について、先生が「私」（と相手）を超えた「第三のもの」として提示されている「何か（＝普遍？）」を通して捉えられているのに対して、わたしは、結局はその「何か」がイメージできずに、あくまで「わたし」にこだわって「重なり合い」という形で考えようとしている……、ということも、そしてこの感想に書いた「普遍」と「個別」のことも……。そうしたところにわたしの「我」の強さが顔を出しているんだなぁ……と痛いほどに、まさに「痛感」させられるのです。『「わたしを超えたもの」や「普遍」って何だろう？』、と、よくわからない。『やっぱりそれも、「わたし」なんじゃないか……』、と、思ってしまう……。

そんな風に、あらためて自分自身の立っている地を確認したような気がします。

第2回（2002年5月9日、午後4時～7時30分）

■科学の方法論

皆藤：連休中、わたしは、ひさしぶりにゆっくりと「自然科学」の本を読んだ。「自然科学がどうのとか言って批判したりするなら、まずは自然科学を知らなくちゃ」と思って。とは言っても、新書レベルだけどね（笑）。概論でも言ってたけど、今読んでるのはこれ³⁾で、その反動がこれ⁴⁾。最近は、気分によって、どっちかを手にして読んでる（笑）。

中桐：わたしは、本ってぜんぜん読んでないなぁ……。でも、わたしも最近、看護学校で「科学とは何か」という話をするために、大学の頃のノートとか引っぱり出して思い出したりはしてた。

皆藤：へえ～。で、「科学」って何だった？

中桐：えっ……。たぶん、「ひとつのものの見方」だと思う。世界をみるための「知」というイメージでわたしは捉えた。それが、因果性とか客観性とか普遍性とかっていうことばであらわされている「世界の切り方」……。なのかなぁ……。と。そういうものをベースにして切り取るのかなぁ……。と。

だから、「科学」そのものを批判する必要ってたぶんないと思う。わたしにとっては、「科学」を気持ち悪いというか、腹立たしいと感じてしまうのは、それが自身を絶対化してるというその一点だろうと思う。わたしは、他の切り取り方とかものの見方を認めない、そういう独善的なところが気に入らない。

皆藤：なるほどね。たしかにそういうところ、あるかもしれない。でも、本なんか読んでみると、自然科学ってやっぱりすごいね。ものすごく進んでいて、自分がやっていることと科学がやっていること、やろうとしていることって、案外近いんじゃないかとさえ思ってしまった。矛盾はしないのかもしれないなぁ……という感じ。こないだの大学院のゼミのときもちろっと言ったけど、「自然科学」という分野で、「関係性」なんてことを言ってる人がいるなんて、ちょっとびっくりした。それを言っているのが、この本、『いま、「いのち」を考える』⁵⁾ っていう本なんだ。これね、河合隼雄と梅原猛と、自然科学をやってる松井孝典という人が、それぞれ「いのち」について語ってる本で、河合隼雄は「児童文学の中の「いのち」というテーマで語っていて、これはおもしろい。まぁ、「いつもの調子で語ってるなぁ」という感じなんだけど(笑)。梅原猛も、「日本文化の中の「いのち」」っていうタイトルで語ってるけど、これもおもしろい。むかしわたしは、梅原猛の考えてることがなんとなく嫌いだった。この先生って、すごく泥臭いこと言うじゃない？ ピュアな、いわゆる純文学みたいなものとは違う、地を這ってるような人間臭い、泥臭いこと言ってるっていうのが、なんとなく「違う」って感じてたんだと思う。でもわたしね、最近、梅原猛の言ってることって好きだし、すごいなぁ……、と感じるようになった。ピュアなもの語るより、泥臭いことを語る方が、ほんとはずっと大変なんじゃないかと思うようになったのかなぁ……。

けどね、まぁこの二人はいつもの感じだし、それはそれでいいとして、この松井孝典が語ってる内容が、すごい！「地球の「いのち」」って題で、自然科学の目からみた「いのち」を語るんだけど、これが、わたしにとってはむちゃくちゃおもしろかったぁ……。あまりにおもしろくて、「そうさそうさ」とか思って一気に読んでしまったんだけど、読み終わってからしばらくして、「もしかしたら、あのときは興奮して読んだから、勝手に自分に引き寄せて読んでしまったのかもしれない……」と思って、冷静に読み直してみた。ところが、あらためて読んでみてもやっぱりおもしろかった。それで、この松井孝典の部分だけちょっと抜き出したりしてわたしなりにまとめてみたから、それをプリントアウトするわ。今日はそれをみてみようか？

(というわけで、レジュメのプリントアウトをして、ふたたび対談に戻る)

皆藤：レジュメは全部で3枚になるけど、一応、上から読んでいく。最初に書いてある「走り書き」は、わたしが書いたものだから、これは、……、まゝ最後にまわそうかな……。まずは、松井孝典の語ってることからみていくと、ここから。

「生命＝外界とエネルギーのやり取りをして自分を維持しているようなもの、＝開放系、＝ある動的な平衡状態が維持されている」、まゝ最後のは「ホメオステシス」みたいなものをイメージするといいと思うけど……。この人は、「いのち」ってことを考えるのに、それはあまりに漠然としてるから、まずは「生命」ってものを考えていこうとするんだけど、それにしても、こういう関係性みたいなところで「生命」を捉えていくっていうのはおもしろいよね？

中桐：その「生命」と、「いのち」って何が違うんだろう？

皆藤：「生命」っていうのは「実体としての」ってことで、「いのち」には実体がない」と彼は言ってる。松井孝典いわく、自然科学が対象にするのは、まゝ「自然」なんだけど、「自然」っていうのは無限でしょ。ここでいう「いのち」みたいに。それは宇宙とかも含んでしまうほど、漠然とした大きさ、巨大さをもっている。そうすると、それをそのまま対象にして研究はできない。だから科学は、「区切る」ということをする。大きな円を「自然」とするなら、区切って「宇宙」、さらに区切って「地球」、さらに区切ってその中の「アフリカ大陸」……とかいう具合に、どんどん区切って範囲を狭めていく。そして、ある小さなポイントを決めて、そこを取り出して「理解」する。そしたら、わたしはここが科学のすごいところだと思うけど、この小さなポイントを「理解」すると、それは「自然を理解した」ってことになるらしい。

中桐：えっ？ それがいきなり、「自然を理解した」になる？ 「自然」を理解するための「手がかり」とかでなく？……なんていうか、ものすごい、というよりある意味、異常な飛躍があると思うけど……。

皆藤：そう。だから、すごいところだね。まゝ、だけど、科学はそうやって考えてきたんだって。

中桐：（絶句）。へえ……。

■科学がもたらす「わかる」／「わからない」システム

皆藤：で、次にいくと、「物理・化学的に考えれば、生命の本質はシステムだということになります」と。つまり、システムっていうのは、「やりとり」ってことだね。松井孝典はこ

のなかで、「生命とはシステムである」って言っている。で、この「システム」っていうのを「複数の構成要素間に相互作用があり、相互作用の結果として状態が決まるもの」として、「地球という星がひとつのシステムである」って言う。で、次がまたちょっとすごいけど、松井孝典は、「私は自然科学者ですからシステムとは何ぞやがわかれば、いのちというものが何なのかも理解できると思うのですが、答えを先に言えば、いまの段階ではできないだろう」と言う。つまり、この人はわかり方には二通りあって、「わからない」というわかり方もある」って考えてる。科学をやっているなかに、こういうことを言える人がいるんだって、わたしは驚いた。

それで彼は、次に「わかる」ってことについて語っている。この「わかる」の辺りのことは、わたしたちもここでこの前ちょっと話してるけど、科学ではこれをどう語るのかってことが次からちょっと見えてくるかも……。

「自然科学」っていうのは、「自然というものが何なのかを理解することを目的とする、＝ある方法論に基づいて（これが科学であるということ）自然を理解する」。このことは、さっきもちょっと言ったこと。で、このときの「科学の方法論が要素還元主義」。この「要素還元主義」っていうのもさっきちょっと触れたけど、「自然を理解するときに、枠を決めて、その枠の中の自然の構成要素を理解するという考え方」と。つまり、さっき言ったみたいに対象をどんどん切り刻んで小さな「要素」にしていって、それを全体の理解と一致させる、という方法のこと。そしてこの人は、こういう方法を徹底させて、「科学は方法論だ」、「科学は何をもってわかるかを、はっきり定義している」と言う。ここで、松井孝典は、「科学は方法論だ」と言っている。これは、おもしろいよね。わたしたちが前に議論していた辺りが、当の科学者から言わせてもそう遠くないってことなんだぁ……、と思った。

そういえば、長谷川真理子って知ってる？

中桐：知らない。

皆藤：彼女は行動生態学をやってる人だけど、わたしはこの人の本^①も少し読んでた。まぁ、なんかあんまり面白くなくて、途中でやめてしまったんだけど……。この本の中で長谷川真理子は「科学とは、仮説→実証の繰り返しである」って言ってた。つまり、この場合だと、仮説と実証の間にあるものが「方法論」になっていくのかな……。

中桐：そのときの「繰り返し」っていうのは、ひとつのテーマに関して循環するような繰り返しをするんじゃないで、ひとつのテーマを実証したらそれはもう解決済みで、「終わり」で、次は別のテーマの実証を……、というふうに、ぷつぷつ切れた繰り返しのことになるん

だろうなぁ……。でもそうなっちゃうと、やっぱりなんか、独善的というか、いろんなものを取りこぼすような気がしてしまう……。

どちらにしても、確かに、どんなテーマに関しても、仮説→実証のプロセスで同じ手順というか、同じ方法論を使える、使うべきだ、とするとそれが「科学」なのかもしれない。そのときの「方法論」って、「手順」みたいなイメージかな……。

皆藤：長谷川眞理子の考えているようなものを「方法論」として、あるいは松井孝典も「科学は方法論だ」って言ってるけど、そうなりとやっぱりわたしが言いたい、というか考えたいのは方法「論」じゃなくて〈方法〉だな、と思う。「方法論」ではない、だから「科学」ではない、〈方法〉というものを考えていく方向っていうのがある気がする。

中桐：「方法論」と〈方法〉かぁ……。

皆藤：まぁ、レジュメをもう少し進めようか。

「自然科学的な意味でわかるということとは異なる「わかる」がある。理解する、わかるといっても、わかるという感じ方に二通りあると思うのです。システムというのは、要素還元主義的な、従来の自然科学的な方法論では、ぜったいにわからないかもしれない対象なのです」。「科学の用語で言う、わかるということの具体例は、現在、過去がわかると、未来が予測できるということです。……しかし、過去と現在がわかっても、未来にはぜったい予測できない現象があるということは、理論的には、むかしから知られていたことです」。「システムの構成要素が増えて複雑になってくると、挙動が予測できない現象が起こってくる」、これを松井孝典は「カオス」と呼んで。「システム」とは、「カオス的（複雑系）、予測不可能な非常に複雑な振るまいをする」もの。「生命＝システムとすると、生命のひとつの特徴は「従来の意味では理解不可能ないろいろな挙動を示す」ということであり、これは「いのち」の特徴でもあるのではないか」と。

わたしは、このことはたとえば、人間関係なんかを考えてみても似たようなことが言えるのかなぁ……と思った。たとえば、AとBという二者関係があるとして、この場合その関係を考えようとすると、二人をつなぐ1本の線が問題なんであって、それを捉えればなんとか予測できていたことでも、そこにCという3人目が入ってきて、さらにDが入ってきて……ってなると、それぞれの人間をつなぐ線は、1本から3本、3本から6本……ってどんどん複雑になって予測不可能な要素が入り込んできてわからなくなっていく。……そういうことを言ってるんじゃないかと思う。だから、本来人間関係を考えようと思ったら、それぞれの人は無限の人と人との繋がりをもっているのだから、大変なことになる。とてもすべてを捉え

ることなんてできない。

松井孝典は、この辺りのことを言うのに「織りもの」のたとえをつかってる。「織りもの」っていうのは無数の縦糸と横糸が複雑に織り合わされることで、はじめて一枚の布ができている。だから、もしその全体の模様を見ようと思ったら、ずっと離れて遠くから眺めるしかない。ところがまた、「織りもの」は、そこをほどくとスルスルっとすべてが解けるというある「一点」をもっている。その一点をみつけて、そこをクローズアップしてみると、織りものが見えてくることもある。……つまり、「わかり方」にも二通りはあるってことかな。そして「科学」は、その「一点」を取り出して織りものを理解しようとする。つまり、後者的なわかり方をする。そして松井孝典は、だからこそ科学っていうのは、織りものの全体像とか、全体の模様とか、それはここで言う「システム」ってことになると思うけど、そういうものを「わかる」ための方法ではないって言ってる。それはまあ、前者的なわかり方ではないってことでもあるかな……。

中桐：今、その話を聞いていて、ちょっと「構造主義」をイメージした。たしか「構造主義」っていう考え方も、最初は、対象となる「世界」を、たんに要素を足していった合計しただけの「全部」じゃなくて、そういう要素が複雑に連鎖しながら創り上げている「全体」なんだ、と考えようとしたものだったんじゃないかな。ただ、それがどこからか狂った。……、ようにわたしには思えた。あんまり詳しくは知らないけど、それがどこからか、なぜか「科学」の方法に回収されていったような印象を受けたような……。もうだいぶ前の印象だから、けっこういい加減だけど……（笑）。

でもその意味でも、ここでちゃんと二つの「わかる」が区別されてるのは、わたしにとってはおもしろい。

■「システム」としての「いのち」

皆藤：わたしは、構造主義っていうのは、よく知らないからなあ……。まあ、もう少し松井孝典の論について進めて見てみると……。

「システムとしての地球」。「ガイア仮説＝地球も一種の生命である（地球生命体）という考え方」。「地球＝生命体＝システム＝複数の構成要素があり、その間に関係がある」。「自然科学者の仕事＝『自然というビッグ・バン以来の宇宙、地球、生命の歴史を記録した古文書を読み解くこと』」。

「地球と人間」。「地球はひとつのシステムであるから、人間が地表環境をどれだけ破壊し

ようとも、生きられなくなるのは人間の方であり、人間がいなくなれば地球は元の状態に戻る。これが、地球がシステムとして機能しているということである」。つまりここから、『地球とか、宇宙や生物のことまで含めて、我々とは何なのかを知っていく』こと」が必要であり、つまりそれは、「我々を相対化してみること」でもある、と。こうやって地球を生命体とかシステムとしてみると、人間が地球を支配している、という捉え方とは違う見方が出てくる。ここでは、そういう人間中心主義みたいなものが通用しなくなって、人間を相対化するようになる。世界を考えると、どういうベクトルの向きを取るかってことでもある。……それにしても、こういう考え方が「科学」という分野からも出てくるっていうのは、わたしは驚いた。

「宇宙の進化とシステム」。「ビッグ・バン＝火の玉状態→宇宙の膨張→宇宙の冷化→宇宙の非平衡状態→宇宙の分化→生物の材料物質の誕生→生物の誕生と分化」。「システムとして機能する、すなわち宇宙にいのちが生まれてくるためには、宇宙が冷えなければいけないし、地球も冷えなければいけない。冷えた結果として、いまの宇宙が生まれて、そのなかには、われわれが生命と呼ぶようなものもあるし、地球もあるし、共通して言えることは、システムの代わりに、いのちと言うとすれば、いのちがある」。ここでは、宇宙の始まりをビッグ・バンという「熱」の概念で説明してる。そして、それが冷化して非平衡状態になることで、つまり「温度差」が生まれることで「分化」するって言っている。これは、ちょっとおもしろい。「熱」のような「温度」から説明するのもおもしろいし、この「分化」っていう語もいい。この発想は、ダーウィンの進化論なんかとはちょっと違う。

それから、松井孝典はここで初めて「いのち」っていうものに辿り着いてる。「生命」から始まって、ここでようやく「システム（いのち）」に辿り着いた。

中桐：でも、ここの辿り着き方って、無理があるような……。 「システム」と「いのち」が、ここでいきなりぼおんって繋がってしまっていて……。わたしには、なんとなくしっくりこない気がしてしまう……。

皆藤：まあそうかもしれない。けど、松井孝典はここで、「いのち」を論じるのに「驚き」っていう考え方を入れている。

中桐：「驚き」？ 科学者が何かを考えるのに、そんなものを入れ込むの？

皆藤：そう。その「驚き」が、さっき言った「熱」と関連づけられている。たとえば、ビッグ・バンというカオスから宇宙や生命が「分化」するのは、植物にたとえば、種から花が咲くみたいなことになる。「種」というものの中には、「花」になるためのすべての要素が含

まれて準備されている。この「種」から「花」の間に「驚き」がある、って松井孝典は言う。

中桐：なんでそのとき、「種」をビッグ・バンと言って、「花」をビッグ・バンとは捉えないんだろう？ たしかに「種」には「花」になる準備があるけど、一方で、「花」にも「種」になる準備がある、と考えられるし、そういう意味ではどちらもビッグ・バン、というか、どちらも不思議な存在だと思うけど……。

皆藤：わたしが思うには、このとき科学者がやっぱり「花」をビッグ・バンと捉えないのは、「種」の方がずっとしょぼい存在だからかな。こんなしょぼいものから、こんなすごい花が咲く……。やっぱり「驚き」は、そっちにある。そっちにしかない、と言ってもいい。きれいな花が、枯れて小さな小さな種になって地に落ちる……。そこには「驚き」ってないでしょ？

中桐：「驚き」かぁ……。

皆藤：そう、松井孝典は、それを、「いのち」を考えるキーワードにしている。

■「システム」への視点／人間の相対化

皆藤：それから、次に進むと、「人間圏」って言うところ。「人間圏」ってことば、わたしはこの本を読んで初めて知ったけど、知ってた？

中桐：知らない。わたしも、今はじめて聞いた。

皆藤：「現代という時代＝『人類が地球システムのなかで、人間圏という一つの物質圏をつくって生き始めた時代』。『人類＝440 万年ほど前にサルから分化した。しかし、人間ではない』。『人間の誕生＝農耕牧畜（1 万年ほど前）という生き方を始めたとき、ヒトから人間になった。すなわち、「地球システムの、ものとかエネルギーの流れに関与して生きる」ことを始めたときにヒトから人間という存在になったのである』。『地球システム』は「有限」だから「→人間圏の誕生」によって当然「→他の圏にしわ寄せがいく」それが「＝環境問題、資源・エネルギー問題、人口問題、食糧問題の本質」であると松井孝典は言っている。『生物圏＝20～25 億年前に誕生＝地球の汚染（汚染物質としての酸素によって地球環境が汚染された）』。『その汚染物質を、現代は資源として使っている（鉄鉱石）』。この辺りはおもしろい捉え方だと思った。さらに、『大陸の誕生』というのも同じ文脈で語っていて、それは『海は大陸物質によって汚染された→そのために「地球」になった』んだと言う。だから松井孝典は「新しい構成要素が生まれると、われわれが今汚染と呼んでいる現象は必ず起こる」って言っている。だから、汚染をしないようにとか、地球にやさしくとか、そういうことではなく、『人間圏の将来を議論するときには、システムということを考える必要がある』。こ

こでいう「システム」っていうのは「＝相互作用＝関係性＝いのちの本質」となるんだけど……。

と、一応ここまでが松井さんの論になってて、ここから先が梅原猛と河合隼雄を含めた三人の対談のなかの、松井孝典のコメントだけをまとめたものになってる。続けてちょっと読んでいくね。

「従来の学校教育＝要素還元主義＝いのちの本質を理解させることは困難である」。

「要素還元主義に代わる方法＝システム」。まٰこれは、「関係性」と言ってもいいと思うけど、その意味ではわたしが考えようとしている〈方法〉なんかと繋がってくところでもあるよなぁ……。

で、「人間を絶対化しないで「相対化」してみる視点をもつこと」。この辺りは、最初に中桐さんが言っていた、科学が自分を絶対化することの気持ち悪さ、みたいなところと繋がってくるんじゃないかなぁ……、って思うけど……。

■「関係性（システム）」の「定義」

皆藤：「生命は実体があり要素還元主義的に定義できるが、「いのち」というのは実体がない。関係性だけである」。「関係性は定義できない。定義するという言葉自身が要素還元主義である」。松井孝典は、「関係性」とは定義ができないものだと言っている。ここはちょっと講義でも言ってたところだけど、わたしもこの辺りは、そうかなぁ……って思う。定義はできないなぁ……、と。

中桐：……。わたしにはちょっと納得できない。どうして定義ができないんだろう……？

皆藤：たとえば、関係性っていうのは、無限の可能性を含みもっているから、そうすると絶対に分化したりすることはできない。もし言葉によって何らかの「定義」をしたとしたら、「関係性っていうのはこういうものです」って言ったとしたら、その途端にそれは何らかの線で「区切る」ことになって、捨てるものが出てくる。定義をしたその瞬間に、「関係性ではないもの」ができてしまう。そうすると、それはもはや違う。「関係性」ではなくなる。……、そういうことかな。

中桐：でも、わたしは「関係性」って「カオス」ではなくて、「人間」の世界のものだと思うから、そうだとしたら「ことば」っていうものと矛盾する存在だとは思わないんだけど……。やっぱりなんとなく、納得がいかないような気がしてしまう……。でも、今はこれ以上うまく説明できないから、もうちょっとこの辺りは自分なりに考えてみる……。

皆藤：そっか。考えたらまた聴かせて。

■「わからない」ものの存在（限界）への自覚

皆藤：次に進むと、「言葉が意味をもつのは、関係性があるからである」。「複雑系というのは、関係性という視点から自然を見ていこうとする考え方である」。「従来の要素還元主義的な意味での『わかる』という現象は限られている。そういう意味では、わからない現象というのが自然界にもいっぱいあるということです。複雑系の考え方は、そのバックグラウンドを与える。私は、複雑系の見方が自然の理解を今まで以上に深くしていくとは思わないのです。複雑系という視点からの理解というのは、いろいろなものに関係性がありますよ複雑なものは複雑ですよという以上のことは言えないと思います。この問題は結局、わかるということは何かということにつながっていて、近代をもたらしたような、要素還元主義に代わる新しい方法論になるかということ、そうではないと思っています」。ここはなんか、すごいよね……。科学者だなぁ……。という感じもする。

中桐：たしかに。でも、少なくとも、「限界を知っている」というか、科学にもわからない、捉えられない領域があるってことを科学者が知っていてくれるのは、嬉しい。わたしは大学で、ひたすら科学的な定法を使って心理学をやってきて、「あぁ、科学ではどうしても捉えられないものがあるなぁ……」って感じて、臨床心理学をやろうと思ったんだけど、そのとき、わたしの感じていた「科学の限界」みたいなものについて語ってくれる科学者っていなかった。

皆藤：一般的な科学者は、「それは『まだ』説明されてないだけで、これから科学が進歩すれば……」みたいな言い方をするからね。

中桐：そう。科学万能主義みたいな。科学そのものの限界ではなくて、「まだ」。今の段階では「まだ」。もしくは、「もっと細かく検討すれば……」、みたいな。でもわたしは、そうじゃなくて科学そのものにも限界があって、このままずっと進んでいっても、やっぱり触れられない世界というか領域があるんじゃないかと感じていた……。

皆藤：うん。それはわかるよ。でも、おかしいことを言ってない？ 「科学」それはたぶん「科学性」って言うてもいいと思うけど、それをずっと延ばしていても届かない、触れられない世界がある。「だから」臨床心理学って、おかしくない？

中桐：（笑）たしかに。今にして思えば、たしかにおかしい。でも、最初はそうだと思ってた。こっちに来るまでは、わたしが大学でやってたような科学をベースにした実験心理学と

は根本的に違うものが臨床心理学だと思ってたから……。だけど、違った。

皆藤：これ（臨床心理学）も、科学と一緒にだった？

中桐：そう。一緒だった。実際に京大に来て臨床心理学の授業を受けて、「あれ？」って思った。「なんで？ これじゃあ、わたしが大学でやってたのと同じじゃん……」って。事前に本とか読んで、外から見てるかぎりでは違うはずだったんだけど……。で、臨床教育学に出会って、「あれ？ わたしがイメージしてたのって、もしかしたらこっちかも……」って。劇的な出会い（笑）。

皆藤：ほんとなら、臨床心理学は科学とは違うパラダイムをもってるべきなんだろうね。でも、もてていない。しかも、もてていないという自覚がある人も少ない。

中桐：自覚がないって、やっぱり怖い。独善的になるし、万能感みたいな錯覚を起こしそうだし……。そういうのって、すごくわたしを傷つける。だから、ここで松井孝典が、科学者でありながら科学の限界を語っているところはすごくいいなあって思った。

■「身体（性）」と科学

皆藤：そういえば、心理学と科学のつながりといえば、やっぱりフロイトかなあ……って思うけど、フロイトが描いたこの図は知ってる？ もう見るのも嫌かもしれないけど……。

こうやって縦に長い楕円になってて、一番上に「意識」、次に「前意識」、それから「無意識」ってなってるやつ。

中桐：知ってる。

皆藤：そう。じゃあ、この図の一番下が閉じてなくて、そこに「身体」って書いてあるのは知ってた？

中桐：えっ！ そんなの生まれて初めて聞いた……。もう何十回とその図は見てきたし、自分でもノートに山ほど描いたけど……。下が閉じてないっていうのはそんなふうに描いたこともあったかなあ……っていう気がするけど、「身体」なんてことばに記憶はない。

皆藤：フロイトが描いたもともとの図にはちゃんと入ってるんだけど、ここをきっちり論じてる人は少ないね……。昔、河合隼雄がちょっとこの辺りのことを論じてたけど……。

（……とか話しながら、フロイトの描いた原版の図を著作集からひもといてふたりで眺める）。

中桐：知らなかったなあ……。

皆藤：そう。だからわたしは、たしかにフロイトを「科学的」っていうこともできるんだけど、ここに書かれてる「身体」をどう捉えるかで、その位置づけも随分と変わってくるんじゃないかと思うんだ。通常ではこの「身体」っていう用語も、フロイトが口唇期とか肛門期とか、身体と関連するタームで「こころ」を語っているから、それとの関連でさらっと流されてしまう、というか、さらっとわかったような気になってしまうんだけど、わたしはなんかもっとすごく大事なもののなんじゃないかと思ってるし、そう考えると、フロイトって不思議な人だなあって思う。

中桐：フロイトが言ってる「口唇期」とか「肛門期」とかだって、別に実体的な肉体の何かを指して命名しているわけじゃなくて、やっぱりある象徴的な何かを指すものとして使う用語でしょう？ だとしたら、この「身体」っていうのだって、物理的な実体を指すんじゃないくて、何らかの象徴的な「意味」を帯びてると捉えるのが自然だと思うけど……。

皆藤：そうだね。でも、フロイトは、なんでわざわざここを閉じないで、しかも「身体」なんて語を入れたんだろうね……。

中桐：ほんとぉ……。不思議……。

■「科学」との離れがたさ

皆藤：ということで、レジュメがもう少し残ってるから読んでしまうね。次もちょっとおもしろい。「勘」ということについて。

「人間の勘というのは、どうなんですか」との梅原猛の問いに答えて、「全体像を理解するときに、ここを見るとわかるのだという考え方の枠組みのとり方のようなものが勘なのです。ぼくらはそういうものに頼って動いているわけです。より本質的な問題にアプローチしたい。ぼくは自然科学者ですから、どうやったって要素還元主義の枠組みのなかでしか論文は書けない。それは結局、全体のなかで、ここがキーポイントというその点、この糸を切ってしまうと、ぜんぶがぼどけて模様がなくなってしまうというその点、をいかに絞り込んで見ることができるかが、一流のサイエンティストかそうでないかという分かれ目になってくると思うのです。方法論としては、要素還元主義でやるしかないわけですから」。これは、さっきも言ってたところのこと、つまり、「科学」の方法では、全体を区切って区切って「要素」を取り出すわけだけど、それはどこでもいいわけじゃなくて、やっぱり何本目の縦糸と何本目の横糸が交わっている「この」点、というのがあるっていうこと。それを捉えるのが「勘」だって、松井孝典は答えてる。

中桐：しかもここでは、結局は「要素還元主義でやるしかない」って言い切ってる。これは、すごく驚いた。だって、その主張って、ここまで言ってくる論と随分と温度差がある……。なんか、むしろこの断言の方に無理を感じてしまうけど……。ここってちょっと変じゃないかなあ？

皆藤：そう。梅原猛がここで言ってる「勘」っていうのも、たぶんここで松井孝典が答えたようなもののことじゃなかっただろう、って思う。それに、「要素還元主義の枠組みのなかでしか論文は書けない」って、急に論文書く話になるでしょ。これもなんて言うか、科学者に特有の発想なのかもしれないね……。ここでは、そんな話をしてるんじゃないのに……。

中桐：ほんと……。なんか、せっかくここまで来てるのに、それでもやっぱり絶対に守りたい何かがあるのかなあ……。って思ってしまう。崩せない何かがある……。って思ってしまう。崩せない何かがある……。

皆藤：あのさあ、「コンコルドの誤り」って知ってる？

中桐：知らない。聞いたこともない。

皆藤：昔、科学者たちがその当時の英知を一堂に集結させて、「コンコルド」という飛行機を作っていた。ところが、ある段階まで来たところで、これは絶対に世の役に立つものにならない、ということがはっきりしてしまった。人類にとっての益にはならないことが明らかになった。ところが、ときの科学者たちは、これを最後までつくりあげてしまった。その理由は、「最先端の科学の知の結晶として、せっかくここまで作ったんだからもったいない……」、と。

さっき言ってた長谷川真理子は、これを「コンコルドの誤り」と呼んでいる。科学者たちはやたらと過去の貯金にこだわって、「それを全部使わなきゃ」とか思っているようだが、そもそもそれが間違いだ、と。たとえ過去の貯金でもその当時の英知でも、それが絶対に「益」にはならないとわかったら潔く捨てるべきだ、と彼女は言っている。

中桐：……。でも……。わたしはなんか、その見解には納得がいかない。そうやって、「絶対に「益」にはならない」とか言い切れるところが嫌だ。「そんなのどうしてわかるの？」って思ってしまう。いつ、どんな形でそれが「益」、ではないにしても何らかの「意味」、を生むかなんて誰にもわからないはずでは……。ってわたしは思う。だから、そこで飛行機を作ってしまった人たちにより共感してしまう。わたしなら、やっぱり作るなあ……。って。

皆藤：そうそう。たしかにそうだと思う。でも、それは「科学者」ではないんだろうね。ここで飛行機を作ってしまった人たちは科学者ではないだろう、ってわたしは思う。

中桐：科学者ではない？

皆藤：そう。でもまあ、その観点からはちょっとずれるかもしれないけど、わたしがその話からイメージしたのは、科学がこれまでの貯金に縛られてる……、ってこと。それまで積み上げて構築してきた知のあり方みたいなものに、すごく固執して、そこから離れられないのかなぁ……と。それを「捨てる」ことの困難さみたいなことをイメージした。

中桐：そっかぁ……。それが、松井孝典のみせてる固執なんかと、ちょっとかぶるのかなぁ……。

皆藤：う～ん……。そんなところかな。まあ、進めようか。次は「創造力」、クリエイティビティについてだけど……、「創造力ということを使う人がいますが、ビッグ・バン以来の歴史的産物が自然ですから、自然を知るとは、自然という古文書を読み解くことで、行間を読むような洞察力は必要としても、科学者に創造力は必要ないと思います。自然を読んでいるだけなのです。創造した瞬間から、それは自然科学ではない。神の世界へ行ってしまうのです」。ここで松井孝典が、「古文書を読み解く」っていうたとえで語ってるのは、この講演が児童文学の愛好会か何かの集まりだからだけど、それにしても、「創造力は必要ない」って、これはどう思った？

中桐：なんかやっぱり、「勘」のあたりから、この人の言ってること変になってきてないかなぁ？ と思ってしまうなぁ……。なんか無理が出て変になってきてるような感じ……。

ここに関しては素朴にびっくりした。わたしの発想とはまるっきり逆だったから……。わたしは、「ただ自然を読む」、なんてことこそ神にしかできないことなんじゃないかと思う。人間には絶対に限界があるし、「わたし」には「わたしの読み方」しかできないと思うから。だからむしろ、必要とか必要じゃないとかじゃなくって、人間であるかぎり「創造力」に頼って創造することしかできないんじゃないかと思う。それが、神への謙虚さというか……。なんかうまく言えないけど、わたしなら、「ただ自然を読んでいるだけ」なんて言う方が、ずっと傲慢な気がする。

皆藤：そう。わたしも同じようなことを思った。この辺りにはやっぱり違和感を感じてしまう。中桐さんのことばを使うと、「変になってきてる」のかもしれない。

それから、最後のところだけど、「今教育というのは、わかっている知識だけを教えるようになっている。いままでは物質的に右肩上がりの文明だった。それが、停滞する文明にならざるをえない。そのときの考え方は関係性に注目した新しい考え方を生み出す以外にない。停滞というのは悪いことではないわけです。右肩上がり信仰からいくと悪いことだけれども、永遠に右肩上がりはずっとありえないことです。現代はそのフェイズに達したという認識

を持たなければいけない。その瞬間から要素還元主義的な考え方ではなくて、関係性に注目する考え方が出てきて、そういう考え方が普遍的になったときに、新しい文明というものが生まれるんじゃないですか」。

と、ここまでが松井孝典の言ってることだけど、おもしろいと思わない？ 科学の世界はここまで来てる。わたしなんかは素朴に、「さすがだなあ……」って思ってしまった。

■科学以外の〈方法〉の模索

中桐：おもしろかった。すごく。たとえば、「分化」の考え方にしても、すごく新鮮だった。これって、どんどんと何か新しい実体が生まれてくるとか、そういう実体的な何らかの変化に着目するってというような、まさに進化論的な考え方ではなくて、世界に新しい「システム」が入り込むことで、世界のもっている「意味」が変わるっていう捉え方でしょう？ それは、新しい結びつき、新しい文脈、新しいコードが生まれることで世界が変わるってことで、「意味論」で世界を捉える捉え方だと思う。鉄鉱石のところなんて典型的で、「汚染物質」だったものが、新しいシステムが挿入されると、つまり新しい結びつき方が生まれると、そのもの自体は何も変わってないにもかかわらず「資源」に変化する。こういう変化のことを「分化」って呼ぶのは、やっぱり「日々進歩」、みたいなどっか価値的なものを含む考え方とは決定的に違ってくる。ここなんて、ほんとにおもしろいと思ってしまう。

皆藤：すごいよね。科学が「意味論」まで来てるっていうのは、すごいことだよなあ……。そう思うと、ここで松井孝典によって語られてるようなことって、わたしたちが考えてることとそんなに大きく矛盾はしないよね？ わたしはこの本を読んで、ここで言われてることをどうやって超えていくんだろう……。こことどういう関係をもっていくんだろう……。と随分と考えさせられてしまった……。

中桐：でも、わたしはそれでもここで言われていることとは、やっぱり何かが違うと思う。なんか、違うって言いたい。

たとえば、「複雑系」とか「カオス」とかを言うときに、松井孝典は「システムの構成要素が増えて複雑になってくる……」って語るけど、わたしは「それだけじゃないだろう」と思う。少なくとも、構成要素の「項目」が増えるってことだけでなく、ここには「時間」ってことが大きく関係してくるだろう……。それは、今日・明日・明後日……。みたいな時計の時間とは違う、なんていうか……。わたしが臨床教育学を通して取り戻そうとしているような「時間」のことなんだけど……。たとえばそういう観点って、松井孝典の論からは

感じられない。

皆藤：わたしも、同じようなことは思ったよ。だから今は、『カオスから見た時間の矢』を読んでるんだ。

中桐：そう思うと、やっぱり科学とは違うんじゃないかな。「時間」を入れ込むことを考えたって、先生が言われているような「関係性」っていうのと、ここで言ってるような「関係性」とはやっぱり決定的に違うものだと言えるような気がするけど……。

皆藤：でもなぁ……。そういう違和感のような身体感覚をひとつのパラダイムにまでもっていくのはけっこう大変な作業だよなぁ……。

中桐：でも、わたしはできると思う。それは絶対にできると思うんだけどなぁ……。

■「身体性」をもつことば〈方法〉への途

皆藤：最後に、レジュメの一番最初に、松井孝典のことばなんかを借りて、わたしが思ったことを走り書きしたのが書いてあるから、そこを見ようか。これは、前にここで話した後、夜に自宅で、ひとりで酒を飲みながらあれこれと考えていて、それではぁ〜っと走り書きをしたものだから、まだそんなに練り上げた文章にはなっていないけど……。じゃあ読むね。

「テキストを読むとき、けっして論理的に読んではいけない。論理的に読もうとする姿勢を放棄するのだ。論理で分化させ切断していくのではなく、テキストというひとつの表現の内に、テキストの発し手（書き手）の息づかいを受けとることが大切なのだ。それはひとつのテキストとの相互交流であり、その営みそれ自体がひとつのシステムと言えるのだ。息づかいを受けとろうとする姿勢に、読み手の「何か（勘）」が働く。それは論理よりも大切なことである。それこそが理解だからである。それこそが書き手そのもの（全体）に迫ることなのである」。ま、ここで、「システム」とかいう言葉を松井孝典から援用してるってことかな。で、次に、これを心理療法に関して言い換えてるんだけど……。「同じように、心理療法のなかでクライアントの話を聴くとき、けっしてわかろうとする姿勢で聴いてはならない。わかろうとする姿勢を放棄するのだ。聴き手の枠組みで分割し切断していくのではなく、クライアントというひとりの人間の内に、クライアントの語りの息づかいを受けとることが大切なのだ。そういう姿勢で聴くのだ。それこそがクライアントとの相互交流であり、その営みそれ自体がひとつのシステムを形成していくのであり、そのシステムこそが心理療法なのである。そうした営みをとおして初めて、理解が生まれようとするのである。それこそが人間そのものに触れることなのである」。

どう？ 言いたいことはわかる？ これについてなんか思うことはある？

中桐：ここでは、「息づかい」という、このことばが大切なポイントのひとつかなあ……と思った。「『息づかい』」っていうのはいいなあ……」って思うし、同時に「これは何だろう？」とも思う。

皆藤：これは、わたしがもっとも悩んだことばのひとつ。

中桐：たとえば、従来ならここは、書き手や語り手の「真意」とか「本当の声」とか「深層的真理（心理）」みたいなことばで語られてきてるところなのかなって、イメージした。でもこの「息づかい」というのは、そういうことを言ってるんじゃない。明らかに違う。その違いが、その後に出てくる「書き手そのもの（全体）」とか「人間そのもの」とかの質を決定づけてくるようにも思うし……。「息づかい」をどう捉えるかで、この「人間そのもの」というところのイメージがすごく変わってくるだろう……と感じる。

皆藤：まったくそのとおりだね。だからわたしは、ここで「息づかい」という「身体」のレベルのことばを使った。それは「真意」とかそういう次元のことばではない。このことばがいいかどうかはわからないけど、でもここは大事なところだしむずかしいところだねえ……。

中桐：そっか、「身体」かあ……。そうなるとやっぱり、書き手の「全体」というその「全体」が、「真意」みたいに書き手の操作性が届く範囲のことだけを言ってるんじゃなく、書き手自身でさえ意識の届かない「何か」をも含みもってそう呼ばれてる、ってことになるんだあ……。

それから、もうひとつ、この「理解が生まれようとする」というフレーズだけれど、わたしもこれとまったく同じようなことを考えてた。この前ここで先生と話した後、「理解」のことについて思いを巡らせていて、ふと、「ああ、『理解』って『する』んじゃなくて、『生まれる』んだあ……」って思った。「『理解する』ってことばは変なんだ……」って。

皆藤：これって、走り書きだけど、わたしが相当いろいろと考えて書いてるってことがわかる？ 実はけっこう考えて、丁寧にことばを紡いであるんだけど……。だからこそ、この前の大学院のゼミのときの発表者のレジュメに腹が立ったのもなんとなくわかってもらえるんじゃないかなあ……？ やっぱり、わたしたちがやろうとしてることは、テキストでも何でも、論理で切り取ることではないだろう……って思う。論理的に忠実に追っていくことではないだろう……と。

中桐：「論理的」って、そのときの論理って「科学的な論理」ってことなら、たしかにそう思う。科学的な論理じゃない〈方法〉について考えるのが、臨床教育学だと思うし……。

■「科学」との対話（「いかに生きるのか」を軸に）

皆藤：それにしても、松井孝典って変な人だろ？ この人はどんなことをしてる人なんだろう……。

（ということで、インターネットで松井孝典のホームページを探索……。プリントアウトする……）

皆藤：こういう人を、集中講義なんかで呼べたらおもしろいと思わない？

中桐：思う。こういう人と聞きたい。って、別に聞く必要はないけど（笑）。でも、こういう人となら「対話」ができるんじゃないかと思う。わたしがここでやろうとしてることについて、真摯な「対話」ができるような気がする。……かなり厳しそう、というか手強そうだけど（笑）。

皆藤：わたしはね、実はこの本⁷⁾は、「科学」を知ろうと思って手にした本じゃなくて、「道徳」について考えようと思って手にした本だった。何かのきっかけで、河合隼雄が「いのち」について対談されてるこの本の存在を知って、で、面白そうだから注文した。だから、松井孝典という科学者も、この本で初めて知った。

この本で、松井孝典は「科学」から「いのち」を語るよね。河合隼雄や梅原猛の語ってる「いのち」へのアプローチとは随分と温度差がある。だけど、ズレてない。ちゃんと対話が成立してる。それはおもしろいことだよ。わたしはつくづく、科学と道徳は矛盾しないな……、と思った。

中桐：一流の、っていう言い方がいいかどうかはわからないけど、あるところまで行けば、科学は哲学に触れるんじゃないかな。わたしならそのとき、アインシュタインなんかをイメージするけど……。科学といえども、そういう領域とシンクロせざるを得ない場所ってある気がする。

皆藤：そう。松井孝典が、どこまで科学者の中でメジャーな立場かはわからないけど、わたしは、相当おもしろい人だと感じる。梅原猛も、この人を相当に気にいってるらしくて、共著とかもけっこうあるんだよ。ま、それにしてもこの松井孝典という人は、やたらとたくさん本を書いているね……。なんで、この人はこんなにもものを書くんだろう？

他の本がどんなふうに語られてるのは知らないけど、これを読むかぎりでは、科学もまた、「いかに生きるのか」っていう道徳の問いに触れるところに行き着くことがある。松井

孝典がやっている場所なんて、なんかそういうところに近い気がするな……。

中桐：そっか。今、わたしが「哲学」と呼び、先生が「道徳」と呼ばれたのは、先生が今言われた「いかに生きるのか」という場所なんだ……。そのことばが一番しっくりくる。「哲学」とか「道徳」とかいうと、既存の体系みたいなものも背負ってるから、なんとなくどこか違和感みたいなものもあったけど、そのことばだとすんなり入ってくる。科学が小手先の技法論だけでなく、行き着くところまで行くと、「いかに生きるのか」に触れざるを得ない……。そう思うと、「それはそうだろうな……」、って思ってしまう。

■「方法論」と〈方法〉

中桐：先生、さいごに一個だけ、どうしても気になることを聞いてもいいですか？

皆藤：なに？

中桐：ゼミなんかでもそうだったけど、わたしはなぜかどうしてもここにこだわってしまうのだけど、先生は、臨床教育学では、っていうか自分が模索しているのは、「方法論」じゃなくて〈方法〉だ」って言われるけど、それってなぜ？

皆藤：うう〜ん……。それはむずかしいな……（少しの沈黙）。

それは、「身の置きどころの違い」かなあ。

中桐：「身の置きどころ」？

皆藤：そう。それは、「科学ではない」ってこと。ここでも「科学とは方法論だ」って言われてみたいに、方法「論」と言ってしまうと、それは「科学」になる。だから、それとは違うという意味で、〈方法〉かな。

中桐：でも、わたしは「論」って、科学だけじゃないと思うからな……。どうもそこはしっくりこないけど……。でも、ひとまず便宜上というか、さしあたって今は、「論」をつけないうってことなら、なんとかわかるような気もするけど……。でもな……。

ことばたちとの再会（2004年1月）

中 桐 万里子

ここでの議論から二年近くのときを経て、あらためてこれらのことばたちに出逢い、正直とても驚きました。二週間に一度のスパンで皆藤先生との議論を重ねたときのことは、昨日のことのようにはっきりと覚えています。どの回も、わたしは呼吸も忘れそうなくらい集中し、やってくることばたちに忠実に在ろうと必死だったのをはっきりと覚えているのです。

けれども、いまふたたびそのことばたちに出逢うと、それらがあまりにも荒っぽく、暴力的とも思えるほどのエネルギーに満ちた「若さ」のようなものを、まだしっかりとかたくななまでに閉ざしている冬の蕾がもつ「かたさ」のようなものをはらんでいることに気づかされ、すこし恥ずかしいような気さえます。

そこには、すでになじまなくなったことばや、息づかい、むしろひどい違和感を覚えるような語りさえも、時に紛れ込んでいます。しかしここに、わたしという途があり、萌芽があることも同時につよく感じました。たとえば、このときから折にふれて議論することとなる「時間／とき」や「関係／関係性」というテーマの語りは、ここでのやりとりがたしかに土壌となっていながらも、随分とカタチを変えてきたのだなぁ……と、しみじみと想ったりしました。

すでに明確なカタチを取っている何かについて「私」が「語る」のではなく、そこに在る「語り」が〈わたし〉をカタチづくり、〈日常〉を、〈臨床教育学〉をカタチづくっていくという在りようを、いまこれらのやりとりと再会することを通してつよく感じました。どんなに素朴な語りでも、そこに在る語りこそが〈臨床教育学〉を出現させる力であり、そうした在りようが〈方法〉であることをつよく感じました。

おわりに

皆 藤 章

この二回の対談を読み返してみると、まだまだ稚拙な議論をしている箇所や、荒い表現が多々見られるのは否めない。それはそれで、体験をとおして精緻化していくことが必要であろう。しかし、わたしがこの対談を読み返してもっとも強く感じたのは、新たな何かが創られていくプロセスの「息づかい」の臨場感である。そして、それがいかに大変なことであるのかも、これまで何度も感じてきてはいたが、ここにあらためて痛感させられた。

両者は、この対談のときとは異なる位置に生きていることを、読み返しながら実感している。固定化しない流動化の生を生きるなかに臨床教育学は在るのだと、わたしは強く感じている。今後、多種多様な体験を生きるなかで、「人間とは何か」ではなく「何が人間なのか」という大いなるテーマに向かって、微力ながら歩みを進めてゆきたい。

臨床教育学を語るとき、既存の概念やタームで形骸的にフレームワークするのではなく、体験から染み出してくることばを紡ぐプロセスこそがこの学問の中核にあることを、こころしたいと覚悟している。

✦註

- 1) 中桐の語りでは、皆藤が「私」としてしているものを、「わたし」と区別して表記している。おそらく、同じ内容を指していると思われるが、両者の使い方に独自の微妙な違いがあるようにも思われるからである。
- 2) 『生きる心理療法と教育——臨床教育学の視座から』（誠信書房、1998年）。なお、「関係性」については、現在はこの語りのときとは考えが大きく変わってきている。ここで語られている「個人と個人の自我的関わりのことを指す」ことばは、現在のわたしにとっては「関係」である。「関係性」については第2回に語られている。なお、この点については、2003年度の「臨床教育学概論」で大きく取り扱った。
- 3) 田崎秀一『カオスから見た時間の矢』講談社、2000年。
- 4) 河合隼雄『物語を生きる』小学館、2002年。
- 5) 梅原猛・河合隼雄・松井孝典『いま、「いのち」を考える』岩波書店、1999年。
- 6) 長谷川眞理子『科学の目 科学のころ』岩波新書、1999年。
- 7) 註5前掲書。

（かいとうあきら 京都大学大学院教育学研究科）

（なかぎりまりこ 京都大学大学院教育学研究科博士課程）